この【六段】では【五段】の受領と京都在住の役人との癒着とは対照的な、滋実の筋金入りの潔白さで、物事を押し進めて来たこのことが、却って悪人どもの恨みをかうことになり、命を落とすことになった無念さを、強い憤りをもって詠い上げる。そこには、太宰府左遷に到る我が身の顚末と重なるものからくる心情が込められている。

【七段】

	原文	訓読
49	骸骨作灰塵	骸骨　灰塵と作り
50	無處傳音旨	音旨を傳ふるに處無し
51	葬來十五旬	葬りてより来のかた十五旬
52	程去三千里	程は去ること三千里
53	廻環多日月	廻環す　多くの日月
54	重複幾山水	重複す　幾山水ぞ
55	憶昔相別離	憶ふ昔　相ひ別離せしとき
56	寧知獨傷毀	寧ぞ知らむ　獨り傷毀せらるるを。

▼［人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼］（その一）